

鹿狩り

国木田独歩

青空文庫

『鹿狩りに連れて行くか』と中根の叔父が突然に言ったので僕はまごついた。『おもしろいぞ、連れて行くか、』人のいい叔父はにこにこしながら勧めた。

『だって僕は鉄砲がないもの。』

『あははははばかを言ってる、お前に鉄砲が打てるものか、ただ見物に行くのだ。』

僕はこの時やつと十二であった。叔父が笑うのも道理で、鹿狩りどころか雀一ツ自分で打つことはできない、しかし鹿狩りのおもしろい事は幾度も聞いているから、僕は子供をすることにした。

十二月の三日の夜、同行のものは中根の家に集まることになっていたゆえ僕も叔父の家にしかけた、おっかさんは危なからうと止めにかかったが、おとっさんが『勇壮活発の気を養うためだから行け』とおっしゃった。

中根へ行って見るともう人がよほど集まっていた。見物人は僕一人、少年も僕一人、あとは三十から上の人ばかりで十人ばかりみんな僕の故郷では上流の人たちであった。

第一中根の叔父が銀行の頭取、そのほかに判事さんもいた、郡長さんもいた、狭い土地であるからかねてこれらの人々の交際は親密であるだけ、今人々の談話を聞くと随分粗暴

であつた。

玄関の六畳の間にランプが一つ釣^つるしてあつて、火桶^{ひばち}が三つ四つ出してある、その周囲^{まわり}は二人三人ずつ寄^{ふたり}つていて笑うやらのしるやら、煙草^{たばこ}の煙がぼうツと立ちこめていた。

今井の叔父さんがみんなの中でも一番声^{こゑ}が大きい、一番元氣がある、一番おもしろそうである、一番肥^{ふと}つている、一番年を取^とつてゐる、僕に一番氣に入^いつていた。

同勢十一人、夜^よの十時ごろ町を出^{たつ}発^{はつ}た。町から小一里も行くとかの字港^{あけがた}に出る、そこから船で『の字崎の浦まで海上五里、夜^よのうちに乗^{のり}つて、天明^{あけがた}にさの字浦に着^いく、それから鹿狩りを初めるといふのが手順であつた。

『まるで山賊のようだ!』と今井の叔父さんがその太い声で笑いながら怒鳴^{なげ}つた。なるほど、一同の様子を見ると尋常^{おのの}でない。各粗末^{わらしき}なしかも丈夫^{わらじ}そうな洋服を着^はて、草鞋^{わらじ}脚^{あし}絆^んで、鉄砲^{てんて}を各手^てに持^もつて、いろんな帽子をかぶ^かつて——どうしても山賊^{いづき}か一揆^いの夜討ち^よぐらいにしか見えなかつた。

しかし一通りの山賊でない、図太い山賊で、か^かの字港まで十人が勝手次第^{あど}にしゃべつて、随分やかましかつた。僕は一人、仲間外^{はな}れにされて黙^{もく}つて、みんなの後^{あと}からみんなのしゃべるのを聞きながら歩いた。

大概是獵の話であつた。そしておもに手柄話か失敗話しくじりばなしであつた。そしてやつぱり、今井の叔父さんが一番おもしろいことを話してみんなを笑わした。みんなが笑わない時には自分一人で大声で笑つた。

かの字港に着くと、船頭がもう用意したくをして待つていた。寂しい小さな港の小さな波止場はとばの内から船を出すとすぐ帆を張つた、風の具合がいいので船は少し左舷さげんに傾かしきながら心持ちよく馳はしつた。

冬の寒い夜の暗い晩で、大空の星の数も読まるるばかりに鮮あざやかに、舳へさきで水を切つてゆく先は波暗く島黒く、僕はこの晩のことを忘れることができない。

船のなかでは酒が初まつた。そして談話はなしは同じく獵の事で、自分はおもしろいと思つて聞いていたがいつしか寝てしまった。それは穏やかな罪のない眠りで、夢とも現うつともなく、舷側ふなばたをたたく水の音の、その柔らかな私語ささやのようなおりおりはコロコロコロと笑うようなのをすぐ耳の下もとの板一枚を隔てて聞くその心地こころよさ。時々目を開あけて見ると薄暗い舷燈のおぼろげな光の下に円座を組んで叔父さんたちは愉快にやつてござる。また中には酔つてしゃべりくたぶれて舷側げんそくにもたれながらうつらうつらと眠っている者もある。相変わらず元氣のいいのが今井の叔父さんで、『君の鉄砲なら一つで外はすれたらすぐ後あとの一つで打つ

ことができるが僕のはそう行かないから困る、なアに、中^{あた}るやつなら一発で中^{あた}るからなア』
と言つて『あははははは』と笑つた。

判事の岡さんが何か言つて叔父さんを冷やかしたようであつたが僕は眠つてよく聞き取れなかつた。

『徳さん徳さん』と呼ぶ声がしたと思うと、太い手が僕の肩を揺さぶつた。僕はすぐ今井の叔父さんだなと思つた。『徳さん、起きた起きた、着いたぞ、さア起きた。』

『眠いなア、』僕は實際眠かつた。しかし人々が上陸^{したく}の用意をするようだから、目をこすり起きて見るとすぐ僕の目についたのは鎌^{かま}のような月であつた。

船は陸とも島ともわからない山の根近く来て帆^おを下ろしていた。陸の方では燈火一つ見えないうで、磯^{いそ}をたたく波の音がするばかり、暗くしんとしている。そして寒気^{かんき}は刺すよう
で、山の端^はの月の光が氷^{こほ}つていようである。僕は何とも言えなく物すごさを感じた。

船がだんだん磯に近づくにつれて陸上の様子が少しは知れて来た。ここはかねて聞いていたさの字浦で、つ^つの字崎の片すみであつた。小さな棧橋、棧橋とは言えないのが磯にできている。船をそれに着けてわれらみんな上陸した。

たった一軒の漁師^{うし}の家がある、しかし一軒が普通^{なみ}の漁師の五軒ぶりもある家^{うち}でわれら一

組が山賊風でどきどき入^{はい}つていくとかねて通知^{しらせ}してあつたことと見え、六十ばかりのこの家の主人^{あるじ}らしい老人が挨拶^{あいさつ}に出た。

夜が明けるまでこの家で休息することにして、一同はその銃^{つづ}をおろすなど、かれこれくつろいで東の白むのを待った。その間僕は炉のそばに臥^ねそべっていたが、人々のうちにはこの家の若いものらが酌^くんで出す茶碗酒^{ちやわんざけ}をくびくびやっている者もあった。シカシ今井の叔父さんはさすがにくたぶれてか、大きな体軀^{からだ}を僕のそばに横たえてぐうぐう眠^ねつてしまった。炉の火がその臍^{あぶら}ぎつた顔を赤く照らしている。

戸外^{そと}がだんだんあかるくなつて来た。人々はそわそわし初めた、ただ今井の叔父さんは前後不覚^{てい}の体である。

僕は戸外^{そと}へ飛びだした。夜見たよりも一段、蕭^{しょう}条^{じょう}たる海辺^べであつた。家の周囲^{まわり}は鰯^{いわし}が軒の高さほどにつるして一面に乾^ほしてある。山の窪^{くぼ}みなどには畑が作つてあつてそのほかは草ばかりでただところどころに松が一本二本突ツたっている。僕はこんなところに鹿がいるだろうかと思つた。

大空の色と残月の光とで今日の天気^{きよう}がわかる。風の清いこと寒いこと、月の光の遠いこと空の色の高いこと！僕はきつと今日は鹿が獲^とれると思つた。

『徳さん徳さん今井の叔父さんを起こしてくれ』とたれか家内うちで呼ぶから僕は帰って見ると、みんな出発に取りかかっていたが叔父さんばかり高いびきで臥ねている。僕は、『叔父さん叔父さん』と肩を揺さぶったがなかなか起きない。頭の髪を握ってぐいぐい引っぱってやっと起こした。『この児こはひどい事をする』と言いながら大あくびをして、

『サアサア！ 一番槍やりの功名を拙者つかまつが仕る、進軍だ進軍だ』とわめいて真っ先に飛び出した。僕もすぐその後続いた。あだかも従卒のように。

爪つまさき先あがりの小径こみちを斜めに、山の尾を横ぎって登ると、登りつめたところが『の字崎の背の一部になっていて左右が海である、それよりこの小径が二つに分かれて一は崎みさきの背を通してその極端に至り一は山のむこうに下りてな』の字浦みづに出る。この三派みつの路みちの集まるところに一本の松が立っている。一同はこの松の下に休息して、な』の字浦の方から来るはずになっていた獵師の一組を待ち合わせていた。

朝日ひゆうがなだが日向灘のぼから昇のぼって『の字崎の半面は紅霞こうかにつつまれた。茫々ぼうぼうたる海の極はては遠く太平洋の水と連なりて水平線上は雲一つ見えない、また四国地しこくじが波の上に鮮あややかに見え。すべての眺望ちようぼうが高遠、壮大で、かつ優美である。

一同は寒氣かんきを防ぐために盛んに焼火たきびをして獵師を待っているとしばらくしてな』の字浦の

方からたくましい猟犬が十頭ばかり現われてその後に取り続いて六人の猟師が異様な衣裳なりで登って来る、これこそほんとの山賊らしかった。

その鉄砲は旧式で粗末なものであるがこれを使用する技術は多年の熟練でなかなか巧みなものである。別して鹿狩りについては『の字崎の地理に詳しく犬を使うことが上手じょうずゆえ、われら一同の叔父おじさんたちといえども、素人しろうとの仲間での黒人くろうとながら、この連中に比べでは先生と徒弟でしの相違がある、されば鹿狩りの上の手順などすべて猟師の言うところに従わなければならなかった。

さていよいよ猟場に踏み込むと、猟場は全く崎の極端みさき はずれに近い山で雑草 荊けいきよく 棘お 生い茂つた山の尾の谷である。僕は始終今井の叔父さんのそばを離れないことにした。

人よりも早く犬は猟場に駆け込んだ。僕は叔父さんといっしょに山の背を通っていると、たちまちはげしく犬のほえる声を聞いた。

『そら出た、そらあすこを見ろ、どうだ鹿だろう、どうだどうだ、ウン早い早い。』と叔父さんの指さす方を見ると、朝日輝く山の端はを一匹の鹿が勢いよくむこうへ走ってゆく、その後をよほど後おくれて二匹の犬、ほえながら追っかけて行く。

画に書いた鹿や死んだ鹿は見たが、現に生きた鹿が山を走るのを見たは僕これが始めて

だから手を拍^うつてよろこんだ。僕のよろこぶさまを見て今井の叔父さんはにこにこ笑つてござつた。

『今に見ろ、あの鹿を打つてみせるから。』

『だつて逃げてしまったからだめだ。』

『どこへ逃げられるものか、山のむこうの方へもう獵師が回っているから、』と叔父さんはすこぶる得意であつた。

さて叔父さんたちの持ち場も定^きまつて、今井の叔父さんは、今鹿の逃げて行つた方の丘を受け持つ事になつたから僕は叔父さんと二人^{ふたり}してほとんど足も入れられないような草^{くさや}藪^ぶの中をかき分け踏み分けやつとの思いで程^{ほど}よいところに持ち場の本陣を据えた。

『今に見ろ、ここに待つていると鹿が逃げて来るから』と叔父さんは言つた。そこで僕はしきりとむこうの丘やこちらの谷をながめて鹿の来るのを待つていた。

十五、六人の人数^{にんず}と十頭の犬で広い野山谷々を駆けまわる鹿を打つとはすこぶるむずかしい事のであるが、元^{みさき}が崎であるから山も谷も海にかぎられていて鹿とてもさまで自由自在に逃げまわることはできない、また人里の方へは、すっかり、高い壁が石で築いてあつて畑の荒らされないようにしてあるゆえ、その方へ逃げることもできない、さらにま

た鹿の通う路はおよそ獵師に知れているから、たとい少人数でも犬さえよく狩り出してくれば、これを打つにさまでむずかしくはないのである。

そこで今井の叔父さんの持ち場も鹿の逃げ路に当たっているので、鹿の来るのを待つてゐるのも決して目的の^{あて}ないのではない。

叔父さんは今に見ろ見ろと言つてすこぶる得意の笑みをその四角な肥えた浅黒い顔にみながらして鉄砲をかまえて、きよろきよろと見まわしてまた折り折り耳を立て物音を聞いてござつた。

折り折り遠くでほえる犬の声が聞こえた。折り折り人の影がかなたの山の背こなたの山の尾に現われては隠れた、日は麗らかに輝き、風はそよそよと吹き、かしここの小藪が怪しげにざわつた。その度ごとに僕は目を丸くした。叔父さんは銃を持ち直した。

『オイ徳さん』叔父さんはしばらくして言った、『今しがた銃の音がしたようであつたが、あの松のあるところへ行つて見なさい、多分一ツぐらいもう獲れているかもしれない。』

僕は叔父さんの言つたところへ行つて見た。そこは僕らが今いたところから三、四丁離れた山の尾の一段高くなつて頂が少し平らなところであつた。果たして一頭の鹿が松の枝の、僕の手が届きかねるところに釣り下げてあつた、そしてそこにはだれもいなかった。

僕は少年心こどもこころに少し薄気味悪く思ったが、松の下に近づいて見ると角のない奴やつのさまで大きくない鹿で、股ももに銃丸たまを受けていた。僕は気の毒に思った、その柔和な顔つきのまだ生き生きしたところを見て、無残にも四足を縛られたまま松の枝から倒さかさに下がっているところを見るとかあいそうでならなかった。

たちまち小藪こやぶを分けてやッて来たのは猟師である。僕を見て

『坊様、今に馬のようなのが取れますぞ。』

『まだ取れるだろうか。』

『まだまだ今日は十匹は取れますぞ。』

しかし僕は信じなかつた。十匹も取れたら持つて帰ることができないと思った。猟師は岩に腰を掛けて煙草たばこを二、三ぶく吸っていたが谷の方で呼び子の笛が鳴るとすぐ小藪の中に隠れてどこかに行ってしまった、僕も急いで叔父さんのところへ帰って来ると、

『どうだ、取れていたか、そうだろう、今に見ろここで大きな奴を打って見せるから。』

かれこれするうちに昼時分になったが鹿らしいものも来ない、たちまち谷を一つ越えたすぐむこうの山の尾で銃つつの音がしたと思うと白い煙けむが見えた。叔父さんも僕もキツとなつてその方を見ると、三人の人影が現われて、その一人が膝ひざを突いて続けさまに二発三発四

発と打ち出した。続いて犬がはげしくほえた。

『そろそろ海を海を、もうしめた、海を見ろ、海を』と叔父さんおと躍り上がって叫んだ。なるほど、ちよつと見ると何物とも判然しないが、しきりに海を遊ぶ者がある。見ているうちに小舟が一艘そう、磯を離れたと思うと、舟から一発打ち出す銃音つつおとに、遊いでいた者が見えなくなった。しばらくして小舟が磯に還かえった。

『今のは太そうな奴だな、フン、うまいうまい。』叔父さんひとりごと独語を言つて上機嫌じょうきげんである。

『徳さん、腹が減ったか。』

『減った。』

『弁当をやらかそうか。』

そこで叔父さんは弁当を出して二人ふたり、草の上に足を投げだして食いはじめた。僕はこの時ほどうまく弁当を食ったことは今までにない。叔父さんは瓢箪ひょうたんを取り出して独酌をはじめた。さもうまそうに舌打ちして飲んでござった。

『これでおれが一つ打つと一そう酒がうまいが。今に見ろ大きな奴を打って見せるぞ』、瓢箪を振つて見て『その時のに残して置こうか。』

さて弁当を食いしまつて、叔父さんはそこにごろりと横になった。この時はちょうど午後一時ごろで冬ながら南方温暖の地方ゆえ、こはるびより小春日和の日のようで、うらうらと照る日影は人の心も筋も融とけそうに生なまあたたかに、山にも枯れ草まじ雑りの青葉少なからず日の光に映してそよ吹く風にきらめき、海の波穏やかな色は雲なき大空の色と相映じて蒼々そうそう茫ひゆう々ぼうぼう、東は際限なく水天互いに交わり、北は四国の山々手に取るがごとく、さらに日向地がじは右に伸びてその南端を微漠煙浪びぼうえんろうのうちに抹まつし去る、僕は少年心にもこの美しい景色をながめて、恍惚うつとりとしていたが、いつしか眼瞼まぶたが重くなつて来た。傍らかたわを見ると叔父さんは酒がまわつたか銅色どうしよくの顔を日の方に向けたままグウグウといびきをかいていた。

この時、小藪を分けてこの方に近づく者がある、僕はふとその方を向くと、すぐその小藪の上に枝のある大きな鹿の角が現われていた。鹿だ！僕はどうかと思つた。叔父さんを起こそうとしたがやめた、起こすと叔父さんがきつと『何だ何だ』と大きな声を出す、鹿が逃げてしまふ、僕は思わず、叔父さんが小松に立てかけて置いた銃つづをソツと把とつた。

鹿は少しも人のいるに気が付かぬかして、小藪の陰をしずかに歩いてこなたに近づいて

来た。手をのばせば銃^{つつさき}端が届きそうなどころに来て立ち止まった。草藪の陰でその体^{からだ}はよく見えないが角ばかりを見たところで非常な大鹿らしい。

僕の胸はワクワクして来た、なぜ叔父さんを起こさなかったかと悔やんだがもう遅^{おそ}い。

十二^{こども}の少年が銃^{つつ}を把^とつて小馬ほどの鹿に差し向けたさまはどんなにおかしかっただろうか。

しかし僕は戦^{ふる}慄^るう手に力を入れて搬^{ひき}機^{がね}を引いた。ズドンの音とともに僕自身が後ろに倒れた。叔父さんが飛び起きた。

『何だ何だ危^{あぶ}ない！ どうしたツ？』と掬^{すく}うようにして僕を起こした。僕はそのまま小藪のなかに飛び込んだ。そして叔父さんも続いて飛び込んだ。

『打ったな！』と叔父さんは鹿を一目見て叫んだ。そして何とも形容のしようなない妙な笑いを目元に浮かべて僕に抱きついた。そして目のうちには涙を浮かべていた。

*

*

*

*

この日は猟師が言ったほどの大猟ではなかったがしかし六頭の鹿^えを獲て、まず大猟の方であった。そして僕のうった鹿が一番大きかった、今井の叔父さんは帰り路^{みち}僕をそばから離さないで、むやみに僕の冒険をほめた。帰路^{かえり}は二組に分かれ一組は船で帰り、一組は陸

を徒歩で帰ることにして、僕は叔父さんが離さないので陸を帰った。

陸の組は叔父さんと僕のほか、判事さんなど五人であった。『うの字峠の坂道を来ると、判事さんが、ちよつと立ち止まって、溪流の岩の上に止まっていた小さな真つ黒な鳥を打った。僕が走って行ってこれを拾うて来て判事さんに渡すと、判事さんは何か小聲で今井の叔父さんに言ったが、叔父さんはまじめな顔をして『ありがとう』と言って今の鳥を受け取った。僕は不思議に思つたばかりでその時は何の事だかわからなかった。

その後二月ばかり経った。その間僕は毎日のように今井の叔父さんの家に遊びに行つて、叔父さんの鳥打ちにはきつとお伴をした。ある日僕のおとっさんが外から帰つて来て、『今井の鉄也さんが鉄砲腹をやった』とおっしゃって、おっかさんを初め僕もびっくりした。

鉄也さんというのは今井の叔父さんの独り子で、不幸にも四、五年前から気が狂つて、乱暴は働かないが全くの廃人であつた。そのころ鉄也さんは二十一、二で、もし満足の人なら叔父さんのためには将来の希望であつた。しかるに叔父さんもその希望が全くなくなつたがために、ほとんど自棄を起こして酒も飲めば遊獵にもふける、どこことなく自分までが狂氣じみたふうになられた。それで僕のおとっさんを始めみんな大變に氣の毒に思

っていられたのである。

ところが突然鉄也さんが鉄砲腹をやって死んでしまった、廃人は廃人であるがやはり独り子に相違ない、これまでに狂氣きやうがいのなおりという薬はなんでも試みて、うの字峠の谷で打った岩いわがらす鳥も畢ひつきよう竟は狂氣きやうがいの薬であつたそうである。それが今は無残の最後を遂げてもう叔父さんの望みは全く絶たえてしまった。

僕は一月ばかり叔父さんのところに行かなかつた。叔父さんの顔を見るのが気の毒さに。そうするとある日、僕が学校から帰宅かえつて見ると、今井の叔父さんが来ていて父上も奥の座敷で何か話をしてござつた。その夜、おとっさんとおつかさんが大変まじめな顔をして兄にいさんと何かこそそ相談をしたようであつた。

そして僕は今井に養子にもらわれた。叔父さんが僕のおとっさんになった、僕はその後何い度もお伴ともをして狛に行つたが、岩鳥を見つけるとソツと石を拾つて追つてくれた、義父おとっさんが見ると気嫌きげんを悪くするから。

人のいい優しい、そして勇氣のある剛胆な、義理の堅い情け深い、そして気の毒おとつな義父さんが亡なくなつてから十三年忌に今年が当たる、由よつて紀念のために少年こどもの時の鹿狩りの物語はなしをしました。

（明治三十一年八月作）

青空文庫情報

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年2月15日第1刷発行

1972（昭和47）年8月16日第37刷改版発行

2002（平成14）年4月5日第77刷発行

底本の親本：「武蔵野」民友社

1901（明治34）年3月

初出：「家庭雑誌」

1898（明治31）年8月

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2012年7月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鹿狩り

国木田独歩

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>